

【研究最前線】

仮名はすべて同じように発音されるのか



玉岡賀津雄

1. 4つの表記形態の共存

世界の言語の文字表記は、通常、1言語で1種類である。たとえば、ヨーロッパ諸言語は、アルファベットのみを使用している。また、中国語も漢字のみが使用されている。韓国語でもハングル表記のみで、漢字は稀にしか使われない。ところが、日本語は、平仮名、片仮名、漢字の3種類の表記が一文の中でさえ使われる。加えてローマ字があり、たいいてい場合は、ローマ字は、仮名・漢字とは別に単独で使われる。しかし、コンピュータやスマートフォンの普及により、ローマ字入力で日本語を書く日本人が増えたため、ローマ字が無視できない存在になってきた。現代日本人は、ローマ字で日本語を入力し、平仮名、片仮名、漢字に変換するという、4種類の表記を同時に使用する多表記併用者といえよう。本稿では、平仮名と片仮名に絞って、日本語の語彙処理上のメカニズムの違いについて紹介する。

2. 平仮名と片仮名で書かれた語と無意味綴の発音

平仮名の「か」は /ka/、「ぐ」は /gu/ と、表記と発音とが1対1の対応になっている。片仮名も基本的に同じである。それでは、日本語母語話者は、平仮名や片仮名で表記された語あるいはでたらめに並べられた仮名の配列を、すべて同じように仮名から拍へ1対1対応で変換して発音しているのであろうか。次に示した仮名表記の語と無意味綴をできるだけ速く発音してみてほしい。

ステレオ /sutereo/ 片仮名表記（通常の表記）の語彙使用頻度の高い外来語
すてれお /sutereo/ 平仮名表記（見慣れない表記）の語彙使用頻度の高い外

来語

シンバル /sinbaru/ 片仮名表記（通常の表記）の語彙使用頻度の低い外来語
しんばる /sinbaru/ 平仮名表記（見慣れない表記）の語彙使用頻度の低い外来語

ソテレオ /sotereo/ 実際に存在する外来語の初めの拍の母音を変えた無意味綴
レテスオ /retesuo/ 実際に存在する外来語の仮名（拍）を並べ変えた無意味綴

これらのすべてが同じ速度で読めた人はいないであろう。それは、これらの語あるいは無意味綴が、すべて見慣れた平仮名あるいは片仮名で視覚的に提示されているようにとも、決して同じ語彙処理のプロセスで発音に達するとは限らないからである。

3. 有意味語効果 — 「ステレオ」対「レテスオ」

「ステレオ」などアルファベット系の言語から借用した外来語は、片仮名で表記される。ところが、同じ片仮名4つをでたらめに並べて「レテスオ」とすると、とたんに発音しにくくなる。この現象は、有意味語効果 (Taft, 1991) と呼ばれ、英語の有意味語と無意味綴の視覚提示から発音までの時間の違いから検証されている (Rubenstein, Garfield & Millikan, 1970)。簡単に言えば、意味を持つ外来語の「ステレオ」の方が、「レテスオ」よりも発音に達するまでの時間が短いということである。これはなぜであろうか。

有意味語と無意味綴の違いを適切に説明しているのは、図1の二重経路モデル (dual-route model) (Coltheart, 1985, 1987) であろう。このモデルは、抑制と興奮からなる並列分散処理 (parallel distributed processing; PDP) の相互活性化の概念を取り入れて、カスケード型二重経路モデル (cascaded dual-route model) (Coltheart & Rastle, 1994; Coltheart, Curtis, Atkins & Haller, 1993) として発展した。「ステレオ」と「レテスオ」の音韻処理の違いは、二重経路モデルの記載型音韻処理と組立型音韻処理の概念で考えると分かりやすい。図1は、カスケード型二重経路モデル (Coltheart, Curtis, Atkins & Haller, 1993) を日本語に翻訳したものである。なお、オリジナルのモデルには、記載型音韻処理と組立型音韻処理および片仮名・平仮名表記の語彙や無意味語の表記

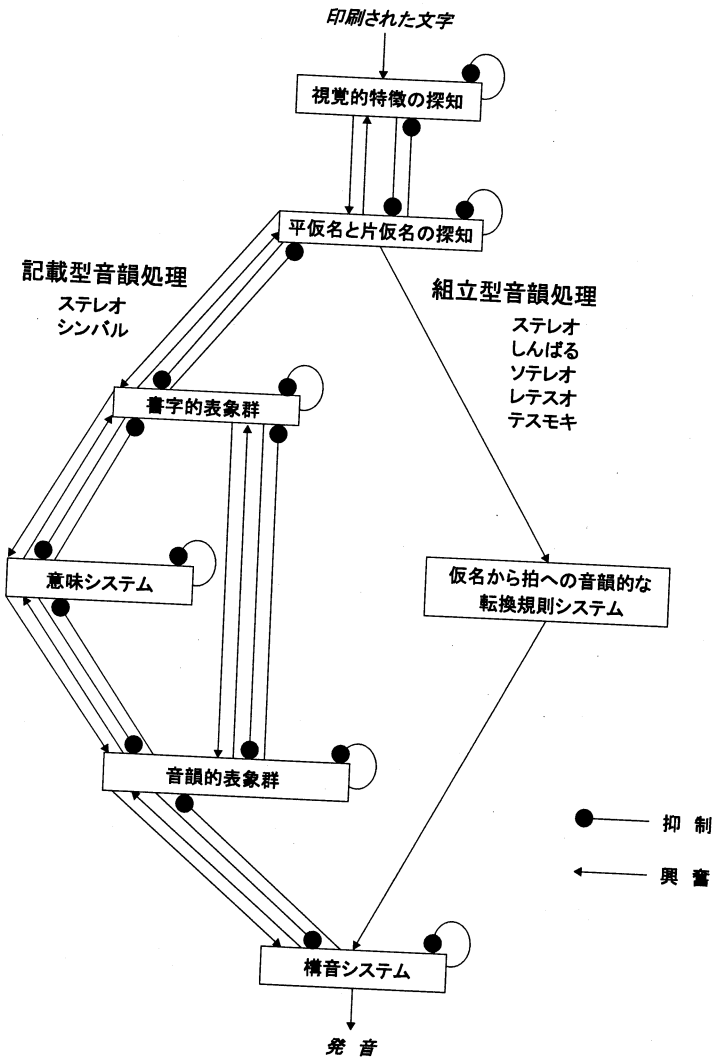


図1 カスケード型二重経路モデル
(Coltheart, Curtis, Atkins & Haller, 1993 から日本語への著者訳)

は記されていない。

脳内には、既習の語彙を記憶した心内辞書 (mental lexicon) があると考えられており、図1では、書字的表象群、音韻的表象群および意味システムが

これに相当する。「ステレオ」のように、既に学習した語が視覚的に提示された場合、この語はすでに脳内に記憶されているので、図1の記載型音韻処理が行われる。「ステレオ」という表記には、書字的表象があり、それが活性化(あるいは想起)され、さらに /sutereo/ という音韻的表象を活性化して、構音システムを経て発音に達する。同時に、意味システムにもアクセスして、「ステレオ」の語の概念的表象やそれに関連した意味を想起させる。ただし、二重経路モデルには、ヨーロッパ諸言語を想定した WEAVER++ モデル (Levelt, Roelofs & Meyer, 1999; 日本語の説明は玉岡, 2013) の心的辞書で想定されているような語彙レベルの統語情報が記載されたレンマ (lemma) は含まれていない。

「レテスオ」は、「ステレオ」と同じ4つの片仮名で構成されているものの、この配列では意味のある語にはならない。そのため、書字的表象が存在しない。そこで、各片仮名を音韻転換するという組立型音韻処理が機能する。片仮名から拍への転換規則にしたがって、「レ」から /re/、「テ」から /te/、「ス」から /su/、「オ」から /o/ と転換され、/re+/te+/su+/o/ を組み立てて /retesuo/ となり、構音システムを介して発音される。結果として、一気に書字的表象から音韻的表象を活性化して単語全体で「ステレオ」を発音する記載型音韻処理の方が、片仮名を一つずつ音韻的に転換してから発音する組立型音韻処理の「レテスオ」よりも迅速に発音に達することになる。

さて、二重経路モデル (Coltheart, 1985, 1987; Coltheart & Rastle, 1994; Coltheart, Curtis, Atkins & Haller, 1993) では、あくまで英語の語彙の音韻処理モデルを想定している。そのため、転換規則の単位は、音素に限定されている。しかし、音韻処理の大まかな単位 (proximate units) は言語に特有であるとする主張がある (O'Séaghdha, 2015; O'Séaghdha & Chen, 2009; O'Séaghdha, Chen & Chen, 2010)。実際、中国語では音節単位 (O'Séaghdha & Chen, 2009; O'Séaghdha, Chen & Chen, 2010; Verdonschot, Lai, Chen, Tamaoka & Schiller, 2015; Verdonschot, Nakayama, Zhang, Tamaoka & Schiller, 2013) また日本語では拍単位 (Kureta, Fushimi, Sakuma & Tatsumi, 2015; Kureta, Fushimi & Tatsumi, 2006) であることが実験研究により証明されている。これらの研究により、言語によって異なる音韻処理の単位があるとする仮説が支持される。

もちろん、日本語の音韻構造は音節であると考え、母音 (V) のみの ϕV あるいは子音 (C) と母音の組み合わせの CV を軽音節、CVV や CVC を重音節とする考え方もある。軽・重音節が日本語の処理単位であることを支持する実験結果 (Tamaoka & Terao, 2004; Tamaoka & Makioka, 2009) もある。もともと日本語の拍は、軽音節と同じであるため、重音節を単独の単位とするかどうかの問題である。いずれにしても、言語によって音韻的な処理単位が異なっていることが証明されているので、二重経路モデルにおいても、音韻転換の単位を言語ごとに異なるとするほうが、より普遍的であろう。

4. 使用頻度効果—「ステレオ」対「シンバル」

意味のある日本語の語彙でも、視覚的に提示された語を音声化できるまでの時間に違いがある。たとえば、「ステレオ」と「シンバル」を比較した場合、2000年から2010年までの11年間の毎日新聞コーパス(全述べ頻度は、形態素単位で299,695,840回)を使って、独自に頻度を調べてみると、「ステレオ」は339回出現した。それに対して、「シンバル」はわずかに20回の出現であった。したがって、たまたまオーケストラでシンバルを叩いているというような例外を除いて、「ステレオ」の方が「シンバル」よりも頻繁に書かれた語として目にするようになる。

「ステレオ」のように語彙使用頻度の高い語は、書字的表象および音韻的表象が想起されるための閾値に達するのが速い。閾値とは、ある語の書字・音韻・意味的表象が活性化されるための活性値の度合いである。活性値が、個々の語の閾値を越えると、その語の書字、音韻、意味が認知される。語彙使用頻度が高いほうが閾値が低く、語彙使用頻度が低いほうが閾値が高い。そのため、語彙使用頻度が高いと、活性値が語の閾値に達しやすくなるので、これらの語彙は発音までに要する時間が短くてすむ。この現象は、語彙頻度効果 (word frequency effect) と呼ばれている (たとえば、Forster & Chambers, 1973; Monsell, 1991; Paap, McDonald, Schvaneveldt & Noel, 1987; Taft, 1991 など)。このように、語彙頻度効果は、それぞれの語の書字・音韻・意味的表象の活性化と閾値の高低の違いとして説明される。

閾値と活性化の関係について例を挙げて説明する。図2に示したように、

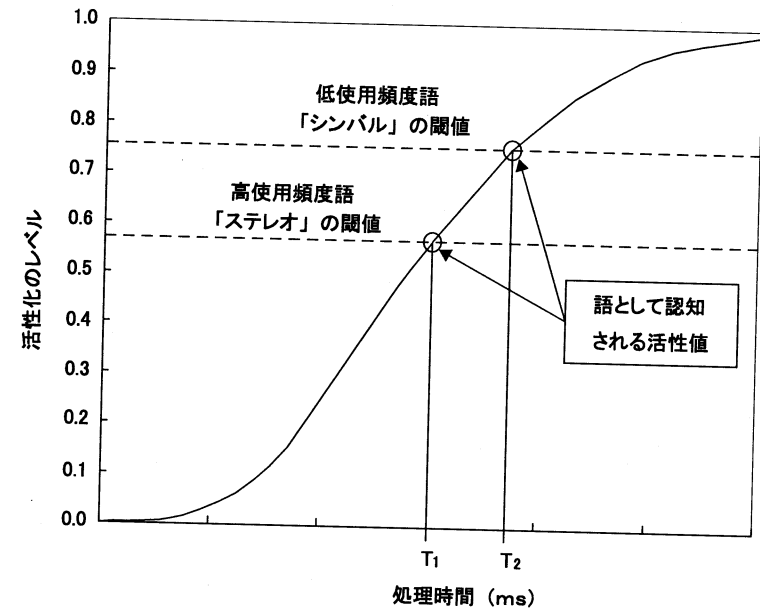


図2 語彙使用頻度の高低による閾値の違い

Y軸は活性化のレベルである。語彙使用頻度の低い「シンバル」よりも語彙使用頻度の高い「ステレオ」の方が、書字・音韻・概念的表象が認知(想起)される閾値が低い。X軸の処理時間(ms, ミリ秒)は、活性化のレベルを示す間接的な指標である。時間とともに活性化のレベルが上昇し、「ステレオ」の閾値に達するのは、X軸のT₁の時点である。それが「ステレオ」が語として認知される活性値に達する活性化のレベルである。しかし、語彙使用頻度の低い「シンバル」は、閾値が高い。そのため、T₂の時点になるまで、閾値に達することができず、語としての認知が遅れてしまう。結果として、T₁の「ステレオ」の方が、T₂の「シンバル」よりも活性値が閾値に達するまでの時間が短く、命名潜時も短くなる。T₁とT₂の違いは、語彙使用頻度による視覚提示から発音までの命名潜時の長さの違いとして実験研究により観察される。なお、閾値については、他の言語処理の効果についても類似の説明が可能である。

5. 表記の親近性効果 — 「ステレオ」対「すてれお」

「ステレオ」は外来語である。たいていは片仮名で表記される。しかし、平仮名で「すてれお」と表記しても、片仮名と同様に /sutereo/ と発音することができる。この場合、片仮名表記の「ステレオ」の方が平仮名表記の「すてれお」よりも速く発音に達することが知られている。この現象は、表記の親近性効果 (Besner, & Hildebrandt, 1987; 八田・広瀬, 1984; 広瀬, 1984; 川上, 1993; 玉岡, 1992; 玉岡・初塚・ケス・ボグダン, 1998; Tamaoka, Leong & Hatta, 1991, 1992) と呼ばれている。

表記の親近性効果を、図1を参照して、「ステレオ」と「すてれお」の例で説明する。片仮名表記の「ステレオ」は、記載型音韻処理で発音に達する。一方、平仮名表記の「すてれお」は、この表記で印刷物で見ることがほとんどない。そのため、語全体の抽象的イメージである書字的表象が存在しない。そこで、図1で示したように、個々の平仮名を拍へと転換しなくてはならない。しかし、いったん /su/+te/+re/+o/ が組み立てられると、構音システムを介して音韻的表象の /sutereo/ を活性化して、その助けを借りて発音に達する。そのため、無意味綴の「レテスオ」よりは速く発音できることになる。しかし、書字的表象から音韻的表象を活性化して発音できる片仮名表記の「ステレオ」よりは、平仮名表記の「すてれお」の方が、発音に達するまでの時間は長くなる。同様の理由で、語彙使用頻度の低い「シンバル」を、「しんばる」と平仮名表記した場合でも、表記の親近性効果のために、「シンバル」の方が「しんばる」よりも速く発音に達することになる。

表記の親近性効果に関する研究で、平仮名表記の親近性効果を報告したのは川上 (1993) である。「もみじ」のように通常は平仮名で書かれる語彙を、片仮名で「モミジ」と表記して比較している。その結果、平仮名でよく見る「もみじ」の方が「モミジ」よりも、日本語として正しい語であるという語彙性判断 (語彙正誤判断とも言われる) が迅速に行われた。発音についても、「もみじ」の書字的表象から /momizi/ の音韻的表象が活性化されるので、片仮名表記の「モミジ」よりも迅速に発音に達すると考えられる。このように、平仮名のほうが見慣れている場合には、片仮名の表記のほうが遅くなる。し

たがって、片仮名か平仮名かという表記の問題ではなく、どちらがより見慣れた表記であるかが、親近性効果の要因である。

さらに、表記の親近性効果は、「ボールペン」や「サラリーマン」など語彙使用頻度の高い外来語においてはもちろんのこと、「エクスプレス」「アラカルト」「メトロポリス」のように語彙使用頻度の低い外来語であっても、「えくすぷれす」「あらかると」「めとろぼりす」と平仮名表記した場合よりも語彙性判断が速く行われたことが報告されている (玉岡・初塚・ケス・ボグダン, 1998)。片仮名表記された外来語の親近性効果は、予想以上に強く認知処理に影響する。

6. 擬似語の実在語との類似性効果 — 「ソテレオ」対「レテスオ」

擬似語は、無意味綴と区別される。擬似語は、実際に存在する単語をもとに作成した語である。それに対し、無意味綴は、基準になる単語がなく、ランダムな仮名配列で構成された語である。英語の場合には、例えば cost に対して kost が擬似同音語と呼ばれる。この種の擬似語は、無意味綴の統制条件である fost よりも語彙正誤課題では判断が遅くなり、語彙命名課題では、逆に発音までの時間が速くなる (Taft & Russell, 1992)。

玉岡・タフト (1994) は、日本語に存在する外来語を基に日本語でも擬似語を作って、擬似語と無意味綴の違いを考察している。語彙性判断実験の結果、「カメラ /kamera/」を基にして、初めの拍の母音を変えて作った「コメラ /komera/」のほうが、初めの拍の子音と母音を変えた「ソキラ /sokira/」よりも否定反応に要する時間が長くかかった。つまり、「コメラ」は「カメラ」の擬似語であるため、「カメラ」という外来語の活性化によって、この語が日本語に存在するかどうかという語彙性判断における正しい否定反応が難しくなったと考えられる。ところが、「ソキラ」では「カメラ」から発音が外れすぎるので、書字的表象が活性化されることがなく、迅速な否定反応が達成されたと思われる。つまり、擬似語と無意味綴との違いは、類似した語彙の書字的表象が活性化されるかどうかにある。実際に存在する「単語らしさ」(word-likeness) を残しているほど、その語が想起されてしまうので、否定し難くなる (Taft & Russell, 1992; 玉岡・タフト, 1994)。しかし、これらの研究は語

彙性判断の実験である。それでは、擬似語と無意味綴は、発音に達するまでの時間に違いがあるのだろうか。

実際に存在する外来語から作成した擬似外来語を視覚提示した場合に、語彙性判断において外来語の書字的表象が活性化されるのであれば、「コメラ」の発音を要求する課題でも、有意味語の「カメラ」が想起されるであろう。その場合は、「カメラ」の音韻的表象の活性化を抑制しつつ、「コメラ」と発音しなくてはならない。一方、「ソメラ」を発音する場合には、「カメラ」が想起されないので抑制の必要がなく、単純な仮名から拍への音韻転換のみで発音できる。そのため、「コメラ」の方が「ソメラ」よりも発音に達する時間が長くなるかと予想される。しかし一方で、仮に音韻処理の単位を拍であるとすれば (Kureta, Fushimi, Sakuma & Tatsumi, 2015; Kureta, Fushimi & Tatsumi, 2006)、「コメラ」も「ソメラ」も「カメラ」と1拍違いだけなので、音韻処理の速度は同じになると予想される。

「ソテレオ」は実在語の「ステレオ」から母音が1つ異なるだけである。そのため、単語らしさから考えると、「ステレオ」が想起されてしまうので、その活性化を押さえなくてはならなくなる。「ソテレオ」の発音は、実在語の「ステレオ」よりも遅くなるが、もしかすれば、実在語の抑制のために、無意味綴の「レテスオ」よりもさらに遅くなるかも知れない。しかし、視覚提示された擬似語の「ソテレオ」の語彙性判断では、無意味綴の「レテスオ」よりも長い時間を要するであろうが、発音においては、「ソテレオ」は、実在語の「ステレオ」の音韻表象の活性化の助けで、無意味綴よりは速く発音されるかも知れない。そうすると、語彙性判断課題と語彙命名課題で、擬似語と無意味綴の処理時間の関係が逆になる。直感的にはこちらが正しい気がするが、「ステレオ」「ソテレオ」「レテスオ」の発音までの時間については、実験がまだ行われていないので分からない。

7. 仮名表記による各種の処理効果のまとめ

片仮名であれ平仮名であれ、仮名で書かれているからといって、すべて同じように処理されるわけではない。仮名表記の語彙には、少なくとも、有意味語効果、使用頻度効果、表記の親近性効果、擬似語の実在語との類似性効

果の4つの処理効果があり、これらの影響により、微妙に処理時間が異なることが分かっている。第1に、有意味語効果により、仮名表記の語が実在する「ステレオ」や「シンバル」は、脳内に語の記載があるので、無意味語の「レテスオ」に比べて迅速に処理される。第2に、語彙使用頻度の高い「ステレオ」は閾値が低く、語彙使用頻度の低い「シンバル」は閾値が高い。そのため、語彙使用頻度が高いほど語として認知される閾値に達し易いので、発音までの時間が短くなる。第3に、「ステレオ」と「すてれお」あるいは「シンバル」と「しんばる」を比較すると、外来語の場合、片仮名表記のほうが平仮名表記よりも頻繁に目にするため、表記の親近性効果により、片仮名表記のほうが平仮名表記よりも迅速に処理される。第4に、「ステレオ」から初めの拍の /su/ の母音を変えて /so/ とした「ソテレオ」は、実在語の「ステレオ」を意図しなくても想起してしまうので、語彙性判断については、その抑制のために時間がかかり、語彙命名については、短くなると予想される。このように、同じ平仮名や片仮名で表記されていても、表記された語や実在語との類似性によって異なる処理プロセスを取ることになる。

(名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授・学術博士 (心理言語学))

■参考文献■

- Besner, D., & Hildebrandt, N. (1987). Orthographic and phonological codes in the oral reading of Japanese kana. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 13, 335-343.
- Coltheart, M. (1985). Cognitive neuropsychology and the study of reading. In M. I. Posner & O. S. M. Marin (Eds.), *Attention and performance XI* (pp. 3-37), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Coltheart, M. (1987). Functional architecture of the language-processing system. In M. Coltheart, G. Sartori & R. Job (Eds.), *The cognitive neuropsychology of language*, (pp. 1-25), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Coltheart, M., & Rastle, K. (1994). Serial processing in reading aloud: Evidence for dual-route models of reading. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 20, 1197-1211.
- Coltheart, M., Curtis, B., Atkins, P., & Haller, M. (1993). Models of reading aloud: Dual-route and parallel-distributed processing approaches. *Psychological Review*, 100, 589-608.
- Forster, K. I., & Chambers, S. M. (1973). Lexical access and naming time. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 12, 627-635.
- 八田武志・広瀬雄彦 (1984). 外来語、非外来語の認知処理に関する研究—日本人大学生と外国人大学生の読み時間の結果から. *読書科学*, 28, 121-129.
- 広瀬雄彦 (1984). 漢字および仮名単語の意味的処理に及ぼす表記頻度の効果. *心理学研究*, 55, 173-176.
- 川上正浩 (1993). 仮名語の語い決定課題における表記の親近性と処理単位. *心理学研究*, 64, 235-239.
- Kureta, Y., Fushimi, T., Sakuma, N., & Tatsumi, I. F. (2015). Orthographic influences on the word onset phoneme preparation effect in native Japanese speakers: Evidence from the word form preparation paradigm. *Japanese Psychological Research*, 57, 50-60.

Kureta, Y., Fushimi, T., & Tatsumi, I. F. (2006). The functional unit of phonological encoding: Evidence for moraic representation in native Japanese speakers. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 32, 1102-1119.

Levelt, W. J. M., Roelofs, A., & Meyer, A. (1999). A theory of lexical access in speech production. *Behavioral and Brain Sciences*, 22, 1-38.

Monsell, S. (1991). The nature and locus of word frequency effects in reading. In D. Besner and G. W. Humphreys (Eds.), *Basic processes in reading: Visual word recognition*, (pp. 148-197), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

O'Séaghdha, P. G. (2015). Across the great divide: Proximate units at the lexical-phonological interface. *Japanese Psychological Research*, 57, 4-21.

O'Séaghdha, P. G., & Chen, J.-Y. (2009). Toward a language-general account of word production: The proximate units principle. In N. A. Taatgen & H. van Rijn (Eds.), *Proceedings of the 31st Annual Conference of the Cognitive Society* (pp. 68-73). Austin, TX: Cognitive Science Society.

O'Séaghdha, P. G., Chen, J.-Y., & Chen, T.-M. (2010). Proximate units in word production: Phonological encoding begins with syllables in Mandarin Chinese but with segments in English. *Cognition*, 115, 282-302.

Paap, K. R., McDonald, J. E., Schvaneveldt, R. W., & Noel, R. W. (1987). Frequency and pronounceability in visually presented naming and lexical decision tasks. In M. Coltheart (Ed.), *Attention and performance*, XII (pp. 221-243), London: Lawrence Erlbaum Associates.

Rubenstein, H., Garfield, L., Millikan, J. A. (1970). Homographic entries in the internal lexicon. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 9, 487-494.

Taft, M. (1991). *Reading and the mental lexicon*. London: Lawrence Erlbaum Associates.

Taft, M., & Russell, B. (1992). Pseudohomophone naming and word frequency effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 45A, 51-71.

玉岡賀津雄 (1992). 英語を母語とする日本語学習者の単語処理の効率. 異文化間教育, 6, 99-113.

玉岡賀津雄 (2013). メンタルレキシコンと語彙処理—レフェルトの WEAVER++ モデル—. レキコンフォーラム, 6, 327-345.

Tamaoka, K., & Makioka, S. (2009). Japanese mental syllabary and effects of mora, syllable, bi-mora and word frequencies on Japanese speech production. *Language and Speech*, 52, 79-112.

玉岡賀津雄・タフト, マーカス (1994). 拍は音韻処理の最小単位となりうるか? : 疑似外来語の語彙正誤判断からの考察. 心理学研究, 65, 377-382.

Tamaoka, K., & Terao, Y. (2004). Mora or syllable? - Which unit do Japanese use in naming visually-presented stimuli? *Applied Psycholinguistics*, 25, 1-27.

Tamaoka, K., Leong, C. K., & Hatta, T. (1991). Processing numerals in Arabic, Kanji, Hiragana and Katakana by skilled and less skilled Japanese readers in grades 4-6. *Psychologia*, 34, 200-206.

Tamaoka, K., Leong, C. K., & Hatta, T. (1992). Effects of vocal interference on identifying Kanji, Hiragana and Katakana words by skilled and less skilled Japanese readers in grades 4-6. *Psychologia*, 35, 33-41.

玉岡賀津雄・初塚眞喜子・ジョセフ・F・ケス・デビット・R・ボグダン (1998). ひらがな対カタカナ—語彙および擬似語の処理における表記の親近性効果. 読書科学, 42, 1-15.

Verdonschot, R. G., Lai, J., Chen, F., Tamaoka, K., & Schiller, N. O. (2015). Constructing initial phonology in Mandarin Chinese: Syllabic or subsyllabic? A masked priming investigation. *Japanese Psychological Research*, 57, 61-68.

Verdonschot, R. G., Nakayama, M., Zhang, Q., Tamaoka, K., & Schiller, N. O. (2013). The proximate phonological unit of Chinese-English bilinguals: Proficiency matters. *PLoS ONE*, 8, e61454.

■(論考) 言語と言語教育■

重力下の縦書きと幻の皇国書式 (上)



屋名池 誠

1. 重力下の縦書き

1-1. まず、図版を見ていただきたい。戦前・戦中の新聞紙面である。

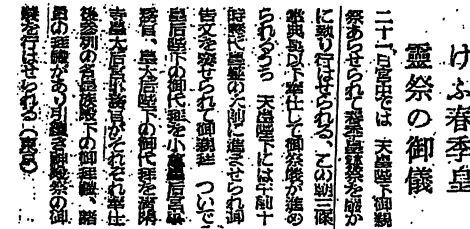


図1 『合同新聞』

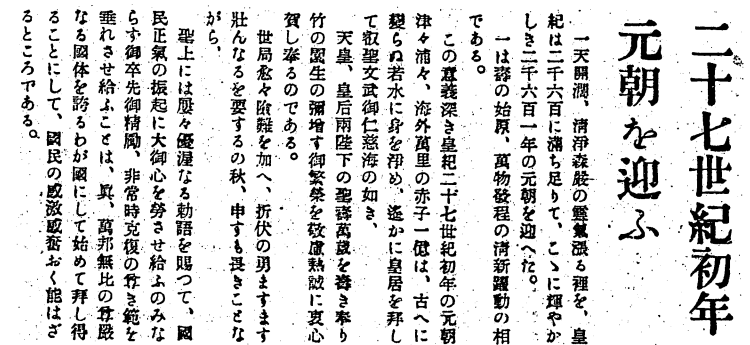


図2 『近江同盟新聞』

図1は1945(昭和20)年3月21日の岡山の『合同新聞』(現『山陽新聞』)の1面の記事で、「天皇陛下」の語が2度現れているが、そのいずれもすぐ上

が空白になっている。図2は『近江同盟新聞』(のちの『滋賀日日新聞』(1979年3月廃刊)の母